

「平和行動 i n 沖縄」参加報告書
(報告者：連合徳島青年委員会 青年委員長 小畑 文人)

2022年11月26日～28日の2泊3日で、連合四国ブロック「平和行動 i n 沖縄」に参加してきた。当該行事は戦後70周年の2015年に企画されていたが、台風の影響で中止となっていたため、実に7年越しでの開催となった。

その当時も当該研修に参加予定だったことを思い出し、そんなに月日が過ぎたのだなと感慨深いものがあった。

さて、事務局を含め、4県から21名の参加者(徳島からは4名)によって開催された行事は、大きく分けて、4箇所の訪問および見学等がメインであった。

- ①対馬丸記念館
- ②平和学習コザまち歩きおよびK O Z A講座(旧キャンプ・コザ[現在の沖縄市])
- ③黄金森・旧陸軍病院壕跡
- ④糸数アブラチガマ

①では、1944年8月に国の指示による集団疎開のため、約1800名が乗船した貨物船・対馬丸が米潜水艦に撃沈され、約8割の命が失われた対馬丸事件について学んだ。何も知らされぬまま、多くのいたいけな子供たちの命が失われ、また、生き残った者の心にも大きな暗い影を落としていることに、非常に心が痛んだ。

②では、米軍占領下・統治時代の面影を残す建物等が立ち並ぶ中、現在は、143千人・57ヶ国の人々が暮らす多文化が混在する、嘉手納基地に隣接する街並みを散策しながら、米軍基地と経済や生活が密着し、切っても切り離せない、複雑な関わりについて、ガイド他の話などから学んだ。マスメディア等の一元的な報道では決して知ることのできない現実の一端に触れることができたと思う。

③および④では、太平洋戦争の最終段階、1945年3月下旬以降の沖縄戦において、4月1日に沖縄本島中部に上陸し、圧倒的な兵力で南下を続ける米軍に対し、追い詰められていく日本兵および住民の様子が、現存する遺構や、ガイドの言葉等を通じて、圧倒的なリアリティを持って心に迫ってきた。劣悪な環境の中、非人間的な体験を余儀なくされた当事者の心情を思うと、大きな鉛を飲み込んだような思いであった。

アブラチガマの漆黒の暗闇を体験した後、ガイドからの「死者は数字で図るものではない、1人1人の顔を持った人達の気持ちに思いを馳せたい」という言葉は心に残っている。

今回の平和行動を経て、戦争に巻き込まれた方々の悲劇や悲哀を生々しい証言や資料等から少しだけでも感じ取ることができた。悲惨な戦争を繰り返さず、平和を維持していくために、政府や人任せではなく、性善説で思考停止に陥るのではなく、私たち1人1人が何をできるのか、何が大事なのかを考え、行動に移していかなければならないと強く感じた。

この度の体験を、今後の人生に活かし、周囲にも伝えていくことを誓い、結びとしたい。

以 上